

## 応答的環境を配慮した保育

網野 武博 若山 剛 O高橋保子 若山 望  
〔上智大学〕 〔京都市立〕 〔村山中藤保育園〕

子どもの発達には、「大人と子どもの相互作用が十分に行なわれることによって、将来に向けての望ましい発育・発達を続け、人間として必要な事柄を身につけていくことができる」と、応答的環境の中で育まれることの意義が保育指針にも述べられている。

また脳の発達に関して述べている「愛は脳を活性化する」と言う著書の中で、松本 元氏は「人間は本来、人との関わりを求める環境欲求を備えている」と、新生児期からの人との関わりを求める子どもの姿を、述べている。

人を信頼する心を育む時期として、最も貴重な新生児期からの関わりに視点をあて、人との関わりを求め、近親者を人として信じる心が備わっていく過程を、ビデオの画像を通じて新生児期の自然の姿を確かめていきたい。

さらに最近とくに問題視されている心の育ちの問題を、新生児期からの関わり方の問題として捉え、応答的環境を担う、大人の存在意義を改めて問うものである。

### 1 相互関係が育つ基盤

新生児期から多感に周囲への働きを全身で示している、反射運動といわれる動きのなかにも、周囲の大人がその動きを発信と捉えて声をかけて対応したり、相手になることにより、動きを静止したり全身の動きに表情らしき変化を見ることができると、人との関わりを求めている、環境への要求行為と見ることが出来る。

又、排尿があったことを伝える生理的な不快感の表現も「むずかる」などの不機嫌な様相を通して、新生児期から不快であることを伝達しており、養育を求めている姿として読み取ることができる。

乳児の発信が読み取れないような様相の場合であっても、周辺に人の気配があり生活の音や声を吸収して、安心感のようなやすらぎを全身で示す姿もある。

目覚めている時間帯は、常に五感覚機能をフルに作動させており、生活の場の資源を自然に吸収しながら、同時に生活者の一員として、大人が読取りの難しい表現ではあっても、自ら育つ力を発揮している姿として、存在感を表示していると読み取ることができる。

### 2 その子らしさの形成

新生児期からの表示（発信）を、周囲の大人がどのように感じ、受けとめ対応するかによって、乳児の心の状態は微妙に動きが変わる。

機嫌の良い時の全身の動きや表情は、相手の反応を待つかのような、周囲への関心を示しており、相互的な快い関係を経験できる乳児は、新生児期の後半から「微笑」も現われてくるなど、心の快適さを表す精神生活の実際を示している。

生理的な不快感もサインを発信すれば、保育者に受信されることを体験的に知っている乳児は、相手に伝わる程度の伝達方法が一定化し、その子らしさの形成がみられる、人間性や個性の発達の原点を思わせる。

強情に泣き続ける・周囲の人間に関心を示さないなどの様相には、健康な状態で誕生した限りにおいて、人との相互関係を求めたにもかかわらず、その中で支えられなかった、安心感や依頼心などが満たされない、人的な環境の中に置かれた状況を表したものと推察できる。

### 3 保育現場から

A 女児4ヵ月目（110日）頃の様相

あやしても表情に変化がなく目の動きもない、誰が抱いても身体を自ら動かすこともなく無抵抗、無反応  
4ヵ月であることもあって母親を求めることも勿論ない。

植物人間のような目の前の女児が、健康な人間として育つのであろうかと案じた、保育計画立案のため母子健康手帳を確認するが、正常出産で医療から見る異常さは何一つない。

「身体的には異常がない」しかし感覚機能が正常であるのかを打診しようにも、反応しないので計りようがない。生育歴の調査を依頼し保育の手がかりを得ることになる。

#### 情報

母親は産休中の育児のときも、1歳児の兄に手がかりほとんど寝かせておいた。泣いたときには抱いたりオムツを取り替えたりの世話をしていた。

産休が切れた2ヵ月頃から隣家に預け現在に至る。  
隣家の保育環境＝夫婦と子ども（小・中学生）3人のサラリーマン家族、女児のための保育室は6畳一間（家族は誰も使わない部屋）保育者、穏やかな女性で

良妻賢母型。

保育者は家事作業の傍ら女兒を預かる、慎重に預かる思いと大半が寝ている時期であること、泣くのも運動である、室内は安全であることなどを掲げ、3時間置きに部屋を覗き、オムツ交換やミルクを与えていたが、その他の時間内は全く人がなく、応答的環境はおろか人が傍らにいない状態の中に、約2ヵ月間置かれていたことが分かる。

当初は泣いたり、むずかたり、相手を求めて泣き叫んだり怒ることもあったのであろうが、周囲の保育者が無反応であれば、乳児は発信しなくなる、その典型的な事例として提示する。

\* 治療的な保育方法を開始

方針

健康な女兒であること、保育環境による自己表出が困難な状態にあること、人との関わりを知らない、求められない状態にあること、これらを踏まえて保育することが重要である。

実践

5日目のことである、どうしてしまったのよっといながら膝のうえに乗せて、両手で脇の下をくすぐったとき、初めて生理的な不快感をうなるような声で示し、皮膚感覚や身体に受ける感覚は正常であることがわかる。育つかもしいかなという声があがる。

その後は、目覚めている時間は人との関わりを重視し、環境要求の自然な発達を考慮した保育を、そして眠いときは休養し身体の発達全体を考える、全職員の協議の結果、担任以外の職員も女兒の発達を願って、奮闘することになる。

目が動いた、ホッパがピクピク動いた、手足を動かすようになったなど、人的環境の影響と考えられる変化が次第に現われて「あやすと笑う」という相互関係の象徴である、人間的な様相が6ヵ月頃には確認できるようになった。

表情の形成は生後6ヵ月未満を臨界期と考えるほどに、多くの子も達がこの時期までに可愛がられ、あやされることの大切さを示している。

その後の状況

女兒はその後、運動発達にも遅れも見られず、人を信ずる心も辛うじて育ち、普通学級へ進学した。

この事例のほかにも、保育者に受け入れてもらえない不満から、奇声をあげて異常児扱いをされ、障害児施設に保護されていた幼児、這いはじめた頃から悪戯と決め付けられ、怒鳴られ追い掛けられて育ち、2歳6ヵ月の頃には「言葉もでません。多動児です」、と

個人の問題であるかのごとく告げる大人達などなど、事例は数えきれない。いずれも普通学級に就学できるケースがほとんどである。

人の言葉が聞き入れられない、自分の思いを言葉で表せない、人を受け入れられないなどの、人間同志の望ましい関係がもてない子どもや若者たちの戸惑う姿には、人を信じ安心する心が育っていない現象ではないのかと、乳児期の関わり大切さを提言したいのである。

4 人の中で生きること【聴くこと・話すこと】

乳児が何らかのサインを発したとき、保育者は言葉を聞くのではない、喃語や全身の動きの中に求める内容を、察知したり推測したり、前後の様相から洞察したりしながら、可能なかぎり要求の内容により近い所まで考えてみる、いわゆる心の中を考えてみるということが必要になる。

真剣に働き掛けて、乳児の思いに応えられる相手ができるとき、乳児は満足して心の安定が維持される、日々、目と目が合う・声をかける・からだをいたわるなどの小さなできごとからなる心の生活には、要求と充足のバランスが繰り返されている姿を、うかがうことができる、この気持ちの交流が心の安定感を育てて人を信ずる心が備わっていくようである。

時には待たせることもあるが、声をかけることにより、乳児の求めるサインの方法が変わる、「保育者は乳児に関わりを求めていることを受信している」という、サインを声によって発信することにより、乳児は期待と満足感で、強く要求を求めることもなく、短い時間ではあるが「待つ」ことができる。

待てる心の状況は、保育者の声によって「いずれ関わってくれる」ことを予想ができる子どもに育っているのであり、保育者が乳児に信じられている関係といえよう。ここにも心の育ちが潜んでいるということを提言したい。

聴くこと・話すこと・は常に聴覚を通して心身ともに全身で受け止めている。心が育っていく過程として、新生児期からの要求を見落とすことなく、存分に満たせる大人の存在が重要であることを強調し、その大切さを提言する。